



# 追込の重い 女ステークス



本文：四十九院明美  
イラスト：外鯨



追  
い  
込  
み  
の  
重  
い  
女  
ス  
テ  
ー  
ク  
ス



# 目次

・七〇～七九

ナリタタイシン

・二十〇～三十三

アドマイヤベガ

・三十四～四十九

エアシヤカール

・五十～六十一

タマモクロス



ひとりじゃない

ナリタタイシンの場合

ナリタタイシンは、夢を見ていた。

悪夢。悍ましいほどの暗黒色で、忌々しいほどに救いのない悪い夢だ。

夢は、いつも菊花賞から始まる。

体調不良のまま菊花賞を走り、掲示板にもはいれないまままで終わる。現実、タイシンは菊花賞で大敗を喫している。悔しい思い出だ。

しかしこの夢は、思い出とは何かが決定的に違う。

雰囲気。あるいは、距離感だろうか。

ビワハヤヒデとウイニングチケットの背が、遙か遠く離れていく。観客の誰もがナリタタイシンの存在を忘れ、ふたりの活躍に心を奪われている。ナリタタイシンという少女を、存在を、否定している。そう、感じられた。

『アタシを……アタシを見ろッ！ アタシはここにいる、ここにいるんだ！ チケット！ ハヤヒデ！』

我知らず、右手を伸ばす。

『アタシを……おいて、いかないで……！』

そして、場面が病院に映る。

伸ばしたままの手が、空を切つて、膝に落ちた。

『これ以上は危険でしょう』

医者が言う。運動誘発性肺出血。

激しい運動をした際に上昇した血圧によって、肺の毛細血管が破れて出血してしまう病。

夏合宿後の、独りよがりのむちゃくちゃなオーバーワークが原因で発症したこの病が、無理矢理に出走した菊花賞を原因に悪化してしまう。

『有効な治療がまだ発見されていない病気です。これ以上も悪化してしまえば、良くないことになるでしょう。……』

少なくとも年内は、休養に専念してください』

沈痛な面持ちで言う医者は、それだけでタイシンの病状がいかにひどいかを察せられた。

『来年！ 来年まで休めば、走ることができるんですよ……！』

しかし、隣に座ったトレーナーだけは、ナリタタイシンの可能性を信じていた。

『大丈夫だタイシン！ 俺が付いてる、俺と一緒にいる！だから——』

彼がいつものように笑顔を見せる。それが何よりも嬉しくて、夢だとわかっていても目頭が熱くなった。

そうして、彼の大きな手を握って、彼の揺らぐ瞳を見つめて、再起を誓う。史実と、現実と同じように、復帰を目指すために。

けれど、けれども。

これは悪夢だ。決して救われることない、どうしようもなく後味の悪い結末になると決まっているのだ。

場面が、また変わる。

目黒記念。

勝利して終わったはずのレースは、どうしてか着外という事実塗りに変わっていた。

再起を誓ったはずのレースでバ群に飲まれ、前に出ることもできないままでゴールする。掲示板にすら乗れずに惨敗を喫して、図抜けた歓声の中で立ち尽くす。

それだけならば、まだ耐えられた。

どれだけ夢見が悪かろうと、所詮は夢と片付けられた。

恐怖は、この先にある。

震える脚のまま、冷え切った地下バ道を歩き、控え室

に戻ると、そこで必ずナリタタイシンが見るのは、誰もいない真つ暗な部屋だった。

『トレーナー……?』

思わず出した自身の声が、ぞつとするほど、不気味なほど、異様に大きくなって部屋を満たす。

強ばる身体を無理矢理に動かして部屋の奥に進めば、机の上に一枚の紙切れがぼつねんと置かれていた。

契約解除。と、書かれた書類。

それを見て、すべてを察するのだ。

『アタシが……アタシが、勝てなかったから……?』

ここまで来ると、世界はすでに控え室ではなく、見慣れたトレセン学園のターフの上になっていた。

『な、なんで……』

困惑に後ずさりした直後、背後で誰かの足音がした。

自分が発したのではない、別の誰かが発した音。ターフを駆けていく音だった。

恐怖に、唾を飲み込む。

何か途方もなく恐ろしいことが起きようとしている予感があった。振り向けば最後、取り返しが付かない事態になるという確信があった。

振り向いてはいけない。振り向いてはいけない。

それなのにナリタタイシンは、ゆつくりと振り向いてしまふ。自分の意思とは関係なしに、背後の光景を見てしまふのだ。

『いいぞ、前回よりもタイムが縮んでる!』

そうして、目の前で。

『お疲れ様! この調子なら、菊花賞も勝てるぞ!』

かつて自分のトレーナーだった誰かが。

『きつとフアンのみんなも喜ぶはずだ!』

瞳の奥底に焼き付くような、彼の姿が。

『ホント、前の言うことを聞かない、あんなウマ娘なんかより……』

自分ではない誰かを担当しているのを、目撃した瞬間に。

『タイシンなんかより、君のほうが好きだよ!』

「——ッ!?!」

ナリタタイシンは、悪夢から目覚めるのだ。

「ハッ、ハアッ……!」

最悪な目覚めだった。寝汗と、涙で気持ちが悪い。腹の奥底に吐き気が溜まって、ぐちゃぐちゃに暴れている。

「……ッ!」

片手で顔を覆い、力なく布団を殴った。

乗り越えたはずだった。虐げられてきた過去を幾多の栄光で塗り替え、迷いながらも己の信ずる道を見つけて駆け抜けてきた。過去の弱い自分とは、決別したのだ。

それなのに、どうして今更こんな醜い夢を見るのか、わからなかった。

(嘘だ、本当はわかってるくせに)

何かを振り払うために、首を振る。

そう、本当はよくわかっていた。ナリタタイシンの中には認めたくない思いがあった。見ないようにしていた気持ちがあった。

トレーナーへの、恋心。

それが原因なのだと、自覚していた。

「……タイシンちゃん……?」

ナリタタイシンが震える身体を抱きしめると、異変を感じたのだろう、同室のスーパークリークが寝ぼけ眼で起き上がった。

暗がりでもわかる大きな影は、海の色を帯びた双眸をしている。慈愛と、心配の宿った瞳。彼女が多くウマ娘に慕われる所以、深い優しさを示すもの。

けれど今のナリタタイシンには、彼女の優しさがひどく恐ろしいものと感じられた。

「どうしたんですか……何か、すごく苦しそうですよ……お水、持ってきてみましょうか」

「っ……なんでも、ない。放っておいて」

こみ上げてくる吐き気を飲み下して突き放す口調で言う。彼女が、怖かった。彼女の優しさが怖かった。

彼女に甘えてしまえば最後、自分の中の何かが崩れてしまうような、そんな気がしたから。

だから、ナリタタイシンは拒絶した。

「……無理は、だめですからね」

踏み込めないと察したスーパークリークは、この言葉を最後にしてまた横になった。自分にできることの少なさに歯噛みした、悲しい顔を見せなくなかったから背を向けた。

彼女が布団に潜つたのを確認すると、ナリタタイシンも同じように布団へ潜り込んだ。寒気と吐き気、形容できない心細さに震える身体を抱きしめながら、無理矢理に目を閉じた。

ひとりを、夜が包む。お互いに、眠れぬ夜だった。



春の香りを孕んだ風と、麗らかな日差しが降り注ぐ学園の屋上で、ひどい顔色をしているジャージ姿のウマ娘がひとり、無気力に寝転がっている。

小さな体躯と大きな耳のそのウマ娘は、ナリタタイシンであつた。

華やかな季節とは真逆の、青白くやつれたその姿は、阜月賞を制したウマ娘とは思えない。まるで生気が感じられない様子であつた。

彼女がこんなにも衰弱している原因は、トレーナーとの言い争いにあつた。

死人の顔色をしたナリタタイシンを心配したトレーナーが、彼女を慮って練習を休みにしようとして提案して、彼女がそれをいつも以上の苛烈さで拒否して気まづくなつた。

言葉にすれば、なんてことはない。ふたりの間でたまに起こる、些細な喧嘩だつた。

ただし、このときばかりは事情が違つた。毎夜に見る悪夢。

それが、彼女の心に深く大きな傷を残していた。ここ最近、ずっと夢に見るのだ。一生でもと言つたはずのトレーナーが、何も言わずに自分の元から離れていく。

どこか知らない遠くへ、別の誰かのところへ行つてしまふ。自分を置いて消えていく、悲しい夢を。

夢だと知っているのに。ありえないことだと、わかつているのに。彼女の心中から、不安が消えることはなかつた。

どれだけ自身に言い聞かせようとも、腹の奥底に溜まつたどす黒いものが、消えることはない。むしろ日に日に濃度を増して煮えたぎる真つ黒なタールのようになっていく。

普段ならなんてことはない「今日は練習をやめて休みにしよう」という気遣いの言葉でさえも、今のナリタタイシンには異様な雰囲気を感じられた。

だから、トレーナーと喧嘩してしまった。

休む必要なんかないと強がって、そんな顔色をしていても説得寮がないと窘められて、また強がって言い返して。その末に逃げ出して、その末にここへ来た。

過去にナリタタイシンが見てきた悪夢。

心ない者たちに自身を否定され続ける夢とは、まったく毛色の違うこの悪夢が、彼女の精神を手酷く痛めていたのだ。

(……バカみたい)

寝返りを打つ。腕を枕にして、けれど瞳は閉じないままで。寒さとは違う何かで身体を震わせて。

眠る気には、なれなかった。

いつもならばこのお気に入りの場所で、ふてくされた気持ちで昼寝をしていたら。

もしもあの夢を見てしまったら。

そう思うと、どうしても眠る気分にはなれなかった。どれだけ眠くとも眠ろうと思えなかった。死ぬまで眠りたくないと思えた。

(アイツが、そんな簡単に……離れるわけがないのに……)

恥ずかしげもなく「一生でも」なんて言ってしまうほどに入れ込んでいるあのトレーナーが、今更ナリタタイシンを捨てて別のウマ娘のところへ行ってしまうなんて、そんなことは絶対にあり得ない。

ナリタタイシンとて、そんなことはわかっているのだ。けれど。もしも。

本当に、そうなってしまったら。怖くて、苦しくて、悔しくて。

そのまま、死んでしまうかもしれない。

「クソ……ッ」

弱々しく地面を殴りつけて、涙を堪えて歯噛みした。

「タイシン、どこにいるのー?」

「タイシン、いるか?」

その時、屋上の扉が開いて聞き慣れた声が、ナリタタイシンの耳に飛び込んできた。

ウイニングチケットとビワハヤヒデであった。トレーナーに言われて探しに来たのだろうことは、想像に難くない。

「あつ、いた! タイシン!」

「そこにいたのか! 探したぞ、タイシン」

ナリタタイシンは無言で、逃げるようにふたりから距離を取る。その時に浮かべた彼女の表情に、ふたりは今回の件が尋常ではない事態だと察した。

「た、タイシン……」

ウイニングチケットが、一步近づくと、口をまごつかせながら、微かに汗ばんだ右手を伸ばす。

タイシンが、一步後ずさる。カシャン、と背中がフェンスにぶつかって、もの悲しく音を立てた。

「……どうしたのか、聞いてもいいかな」

続けて、ビワハヤヒデが問うた。自殺を思いとどまるように説得するみたいなの、ひどく慎重な話し方だった。

「……っ」

ゴクリ、と。ナリタタイシンは固唾を飲んだ。自身の喉音が、世界の端まで響いた気がした。

「……放って、おいて……」

「すまないが、今の君を放っておけるほど私たちは薄情ではない」

「タイシンが話してくれなきや絶対ここどこかないから！」  
この問答の後、それからしばらくは、三人の間を沈黙が支配していた。

ビワハヤヒデとウイニングチケットはひたすらに言葉を待ち、ナリタタイシンは腹の奥底に溜まった恐怖と戦っていた。

「うっ……ぐくっ……うああ……！」

「た、タイシン!？」

「タイシン、どうしたんだ!？」

やがて、沈黙に耐えきれずに涙を流して崩れ落ちたナリタタイシンは、駆け寄ってきたふたりに自身が毎晩見る夢の話をした。

嗚咽混じりで感情にまかせた拙い説明であつたが、ふたりは何も言わず、静かに彼女の話を聞いてくれた。

そしてすべてを聞き終つた後、ビワハヤヒデは驚いたような、悩んだような顔を。ウイニングチケットは悲しそうな、苦しそうな顔を浮かべていた。

「そ、そっか……苦しかつたよね。そんな悲しい夢……」

慰めの言葉と共に、ウイニングチケットがナリタタイシンを抱きしめる。いつもならうつとうしいと拒絶するのだけれど、今回ばかりは彼女の優しさがありがたかつた。

「夢を見始めたのは、いつからかわかるか?」

努めて冷静に振る舞うビワハヤヒデに、ナリタタイシンはしばし口をまごつかせた。自身の恋心のすべてをふたりに打ち明けるられるほど、今の彼女には勇気がなかつた。

「……アイツの……こと……」

たつた、一言。トレーナーのことを口に出すのが、ナリタタイシンには精一杯だつた。

「アイツ……つて、タイシンのトレーナーさんのこと?」

「フム……」

ナリタタイシンの一言と様子を見て彼女の心情を察したビワハヤヒデは、溜め息にも似た深呼吸をして難しい顔をした。

「これは私の、勝手な憶測なんだが」

それから、言葉に迷っているナリタタイシンの目の前にしゃがみ込んで、こう前置きをしてから論ず口調で話を始めた。

「君はきつと、怖いだろう。トレーナーにどう思われているのか、どう感じられているのか……そして、彼の内面を知ること、今の関係が壊れてしまうのではないかと、恐れている」

どうしてそんなことがわかるのだろう。そう思つた直後に、ビワハヤヒデは見透かしたみたいに苦笑を浮かべた。

「私も、君と同じようなものだからな」

「えっ! ハヤヒデも?」

「ああ」

驚いた声を上げたウイニングチケットに、ビワハヤヒデは静かに首肯した。

「知ってるだろう? 私は最初ブライアンと比較されて、トレーナーたちからナリタブライアンの姉と揶揄混じりに呼ばれていたのを」

「やゆ?」

「簡単に言えば、弱いと見られていた、と言うことだ」  
「そうだったの!? ハヤヒデすつごく強いのに、そんな

ひどいこと言われてたなんて……！」

「まあ、今となつては過去の話だ。ただ……」

これ見よがしに頬を膨らませたウイニングチケットをなだめつつも、自嘲気味に笑つて眼鏡の位置を直したビワハヤヒデは、ナリタタイシンの隣に腰掛けて話を続けた。

「菊花賞で勝つまでは、それが結構堪えていてな……思うように勝てなくて、ふたりに気後れを感じてたのもあつたんだらう。ある時ついに耐えきれなくなつて、トレーナー君に聞いてしまつたんだ」

「なにを？」

「私でいいのか？ ナリタブライアンではなく、その姉のほうで……と」

「つ……どう、言われたの」

わずか言葉に詰まつてから問いかけたナリタタイシンに、ビワハヤヒデは青空を見上げて答えた。

「君だから選んだんだ。と、言われたよ」

ビワハヤヒデはいかにも呆れた口調であつたが、その表情は喜色でいっぱいだった。

「そつか！ 前から知つてたけど、ハヤヒデのトレーナーさんはすつごくいいトレーナーさんだね！」

「ああ、自慢のトレーナーだ！」

ビワハヤヒデが、微笑んで言う。

それからすぐに、彼女の話で意図に気がついたウイニングチケットも、トレーナーの話で元氣よく聞かせる。

「アタシのトレーナーさんもね、すつごくいい人なんだ！ アタシが嬉しかったり楽しかったりした時は一緒に喜んでくれて、悩んだり苦しくなつたりした時は一緒に悲しんでくれてね！」

ウイニングチケットは身振り手振りで話して、身体全体で自分のトレーナーのすごさを表現した。

自分のトレーナーは、こんなにも自分のことを思い考えてくれているんだと、精一杯にナリタタイシンへ伝えた。

そして最後には、改めて、正面から向き合つて言うのだ。「だからね、タイシン。タイシンもトレーナーさんに、ちゃんと話してみたらどうかかな？」

「はなしを……」

「そうだな。気持ちというのとはただ想うだけでは伝わらない。きちんと言葉にして伝えることで、初めてわかるものだ」

言うほど簡単にいくものか。

簡単に自分をさらけ出せるものか。

そう思つて、ナリタタイシンは不安に顔を俯けて、ふたりの視線から逃れてしまう。

今までだつてそうだった。どんな気持ちを抱いてもうまく言葉にできなくて、その上に、素直になれないからキツく当たつてしまう。

不器用で、口下手で、面倒くさくて、どうしようもなく軸がブレていて。そんな自分が、今更トレーナーに気持ちを伝えられるだろうか。ネガティブなことばかり思つて、胸が苦しくなつてしまう。

けれど。

「大丈夫！ タイシンのトレーナーさんなら、絶対に大丈夫だよ！」

「誰よりも……おそらく私たちよりも、君のことを心から想っている人だ」

「うん！ だつてタイシンのトレーナー、タイシンのこと

すつつつごく心配してたもん！」

「だから、きつと。君のトレーナーなら、どんな想いでも受け止めてくれるさ」

ふたりがここまで言うから、ナリタタイシンも覚悟を決めた。トレーナーに夢のことを、自分が抱えている不安のことを、話してみようと決意した。闇の中から浮上していく感覚が、心の中に湧き上がった。

「……わかった。話、してみる」

ぐずぐずと袖で涙を拭ったナリタタイシンは、弱々しくもしっかりした姿で立ち上がる。

陽が、地平線に消えようとしていた。



男は、トレーナー室にいた。

恐る恐る扉の隙間から覗くと、ビワハヤヒデとウイニングチケットが言う通り、わずかに肩を落として茜色の空を見ていた。

「……トレーナー」

ナリタタイシンが部屋にはいると彼はハッと振り返った。逆光の中で、迷子になった子供のような、ひどく泣きそうな表情をしているのが見えた気がして、ナリタタイシンはハッと息を飲んだ。

いつもは忙しく、落ち着きがない、熱血を絵に描いたような彼が、親とはぐれた子供のような表情を見せたことが、彼女にはにわかには信じられなかった。

「タイシン！ ごめんな、またデリカシーないこと言っちゃったみたいでさ」

東の間、彼の表情は気付けば、いつもの凶抜けた笑顔に変わっていた。

隠したんだ、とすぐに察した。誰にも不安を見せまいと、彼は強がっているのだ。同時に、彼も自分と同じだったんだろうとも気がついた。彼もきつと、不安で、怖くて、仕方がなかったのだろう。失ってしまうかもしれない、彼もその事実を恐れていたのだ。

「もう、大丈夫なのか？」

「……ん」

努めて明るく聞いたトレーナーに、ナリタタイシンは顔を俯けてしまう。

ドアに背を預けて、溜め息の混じった深呼吸をする。しつかりと彼の顔を見るのは、まだ少し怖かった。

それから少しの間、静寂がふたりの間に横たわった。

トレーナーも、ナリタタイシンも、話を切り出すキツカケを探していた。

「嫌じゃなければ、だけどさ」

静寂は長く続かなかった。

雲が夕日を隠した頃になつてから、トレーナーが不安を吹き飛ばすほどの笑顔で、優しく落ち着いた声色で、口を開いたのだ。

「何があつたか、聞いてもいいかな」

トレーナーからの問いかけに、ナリタタイシンは最初に沈黙で答えた。恐怖と不安とに板挟みになつて、口をまごつかせるしかできなかった。

しかし親友ふたりの言葉と、彼が一瞬だけ見せた不安と悲しみを思い出して、ナリタタイシンはついに声を上げた。

「……夢を、見たから」

「夢……どれは、どんな……」

「アンタが、勝てなくなつたアタシを捨てて、どっかに行って……ッ、違うウマ娘を担当して……アタシなんかよりよっぽど好きだつて、誰かに言つてる夢ッ……!」

発してしまえば、もう止まらなかつた。言葉と一緒に腹の奥底に溜まつていた黒色のよどみを吐いて、涙と一緒に想いが零れていく。

「そんな、俺はっ」

「わかつてるよ! アンタがそんな簡単にアタシを捨てたりしないなんてこと、とつくに知つてるんだよ! でも……でも、どうしても不安で、怖くつて……苦しい……っ」

「タイシン……」

「だつて……しかたないじゃん! アンタのこと好きになつちやつたんだから、しょうがないだろっ!」

震える手で胸元を握り締めながら、ナリタイシンは半ば絶叫するみたいに叫んだ。彼の揺れる瞳を睨めつて、血を吐くような告白だつた。

「……」

秒針が時を食む音と、荒い息だけが響く室内にあつて、トレーナーは彼女の告白にしばし沈黙していた。

驚愕と困惑が喉奥に詰まつて、言葉らしい言葉を遮つてゐるらしかつた。

当たり前だ、担当ウマ娘から告白されるなど、考えてすらなかつたに違いないのだから。

ナリタイシンは彼の言葉を、答えを辛抱強く待つていた。言つてやつたという気持ちと、言つてしまつたという気持ち半分ずつ抱えて、歯を食いしばつていた。

「俺は……」

そうして。永遠にも思える時間が経つたあとで、トレーナーは静かに答えた。

「俺は、君のトレーナーだ。だから……簡単に、答えることはできない!」

ひゅっ、と息を飲む。

膝から力が抜けそうになつて、背中がドアを擦る。

次には恐るべき言葉が聞こえてくる気がして、耳を塞ぎそうになつた。

「……けどっ!」

直後に、トレーナーはひと際に大きな声をあげて一步を踏み出し、彼女の両肩をがっしりと掴むと、両眼を逸らさずにこう言つた。

「もしもだ、タイシン。もしもその気持ちだが、卒業まで変わつてなかつたら。卒業式の日にも、もう一度……今日と同じ時間にここに來てくれ!」

呆然として、ナリタイシンは言葉を受け止めた。そして、ああ、と安堵と歓喜が混じつた息を吐いた。

「俺は、ずっと待つてるから!」

その一言が、ただただ、嬉しかつた。この気持ちをどう表現したら良いのか、自身の知る言葉のすべてを集めても、ナリタイシンには表現できそうになかつた。

かといつて行動に移そうにも、立場を想えば彼を抱きしめることもできない。誰も見ていないとはいへ、待つていると言つてくれた手前でそれは裏切りに思えた。

だからナリタイシンは、鼻を吸りながら袖で涙を拭い、情けないくしゃくしゃの笑顔で、こう答えを返した。

「アンタが前にアタシに言つたこと、もう一度聞きに來る……絶対に、來るから!」

「アタシがマジだつてこと、  
教えてあげる！」

愛とは何か、本当は私には分かりません。  
愛というのは、執着という醜いものにつけた仮の美しい嘘の呼び名かと、私はよく思います。

伊藤整

体験はここまでです。